

問3 業務パッケージを採用した情報システム開発プロジェクト

平成21年度 午後Ⅱ

問題文は次の手順で解析する。最初に、(1) 設問で問われていることを明確にし、(2) 各段落の記述文字数を(ひとまず)確定する。続いて、(3) 問題文と設問の対応付けを行う。最後に、問題文にある(4) 状況設定(プロジェクト状況の例)やあるべき姿をピックアップするとともに、(5) 例を確認し、自分の書こうと考えているものが適当かどうかを判断する。

問3 業務パッケージを採用した情報システム開発プロジェクトについて

近年の情報システム開発では、業務プロセスの改善、開発期間の短縮、保守性の向上などを目的として、会計システムや販売システムなどの業務用ソフトウェアパッケージ(以下、業務パッケージという)を採用することが多くなっている。このような情報システム開発では、上記の目的を達成するためには、できるだけ業務パッケージの標準機能を活用する。その上で、標準機能では満たせない機能を実現するための独自の「外付けプログラム」の開発は必要最小限に抑えることが重要である。

プロジェクトマネージャ(PM)は、例えば、次のような方針について利用部門の合意を得た上でプロジェクトを遂行しなければならない。

- ・業務パッケージの標準機能を最大限適用する。
- ・業務パッケージの標準機能では満たせない機能を実現する場合でも、外付けプログラムの開発は必要最小限に抑える。

外付けプログラムの開発が必要な場合には、PMは、開発が必要な理由を明確にし、開発がプロジェクトに与える影響を慎重に検討する。その上で、開発の優先順位に基づいて開発範囲を見直したり、バージョンアップの容易さなどの保守性を考慮した開発方法を選択したりするなどの工夫をしなければならない。

あなたの経験と考えに基づいて、設問ア～ウに従って論述せよ。

設問ア あなたが携わった情報システム開発プロジェクトの特徴を、採用した業務パッケージとその採用目的とともに、800字以内で述べよ。

設問イ 設問アで述べた情報システム開発プロジェクトの遂行に当たり、外付けプログラムの開発が必要となった理由、開発を必要最小限に抑えるために利用部門と合意した内容、合意に至った経緯、及び開発した外付けプログラムの機能を、800字以上1,600字以内で具体的に述べよ。

設問ウ 設問イで述べた外付けプログラムの開発に当たり、業務パッケージ採用の目的を達成するためにどのような工夫をしたか、その成果、及び今後の改善点を含め、600字以上1,200字以内で具体的に述べよ。

⑤例も重要。必ずチェック。ここから出題者の意図を汲み取る

⑤状況設定、問題文にある(論文で触れておいた方がよい)あるべき姿をピックアップ

④問題文を段落ごとに線で分ける

③設問と問題文の対応付け(キーワードでマッチングすると短時間でできる)

①設問で問われていることを明確にする。段落タイトルもここで決めておく

②各段落の記述文字数を最初に計画しておく

●出題者の意図（プロジェクトマネージャとして主張すべきこと）を確認

出題趣旨
業務用ソフトウェアパッケージ（以下、業務パッケージという）採用の目的には、業務プロセスの改善、開発期間の短縮、保守性の向上などがあるが、業務パッケージの標準機能を最大限適用して、外付けプログラムの開発を必要最小限に抑えることが、これらの目的を達成するためには重要である。
本問は、業務パッケージを採用した情報システム開発に当たり、外付けプログラムの開発を抑えるために利用部門と合意した内容、及び外付けプログラムを開発する際の工夫点を具体的に論述することを求めている。論述を通じて、プロジェクトマネージャとして有すべき業務パッケージの活用に関する知識、プロジェクト運営の実践能力、利用部門と調整する能力などを評価する。

●出題傾向

本問は、表向きは「パッケージ」にフォーカスされているが、その内容は、本書の「第5章 プロジェクト人的資源マネジメント、プロジェクト・コミュニケーションマネジメント」分野からの出題である。その点を取り違えて、「パッケージ開発の成功」に意識を向けてしまうと、システムアーキテクトの論文になってしまう。特に、プレーイングマネージャはそこを注意しなければならないだろう。

傾向としては、平成9年度問3、平成17年度問1、平成19年度問1、平成20年度問1などが参考になる。対象となる“人”（＝相手）は異なるものの、コミュニケーションを通じて説得・交渉している部分は十分参考になる。なお、パッケージ導入に関する基礎知識は、本書の「第8章 重要キーワード30」を参照のこと。

●解答に当たって

本問は、最近主流になっている“人との関係”が問われている。この年（平成21年度）は、3問中2問（問1と問3）が、この類の問題だったので、改めてその重要性を認識した。

論述のポイントは、“パッケージ導入プロジェクト”に特化されたタイトルになっているものの、利用部門との交渉・説得であり、実際のプロジェクトでも、重要な利用部門との合意形成である。最近の傾向に沿ったもので、（全体の予測は難しいものの）利用部門との交渉、合意形成部分は、十分予測しておかなければならない。

なお、こうした“人との関係”がテーマの問題は、経験者と未経験者で最も差の出る部分だと思う。未経験者にとってはイメージがわきにくく、事前準備も苦労したかもしれないが、経験者にとっては、出題予測をしていなくても書きやすかったはずだ。

ただし、経験者も注意しなければならない点がある。それは、詳細に書きすぎて“木を見て森を見ず”にならないことと、書きすぎないこと。日ごろの鬱憤を発散する場にしてしまわないように注意しよう。

●段落構成と字数の確認

1. プロジェクトの特徴と採用したパッケージについて
 - 1.1 システム開発プロジェクトの特徴 (400)
 - 1.2 採用した業務パッケージとその採用目的 (400)
2. 業務パッケージを採用した情報システム開発プロジェクトについて
 - 2.1 外付けプログラムが必要となった理由とその概要 (400)
 - 2.2 利用部門との交渉 (800)
3. 外付けプログラムの開発
 - 3.1 そのときに私が実施した工夫 (400)
 - 3.2 その成果 (200)
 - 3.3 今後の改善点 (200)

●書くべき内容の確認

●総評と全体構成の組み立て方

この問題は、段落タイトルの付け方で多少考えなければならぬところがあるものの、段落分けそのものは特に難しくない。設問で問われているとおりに分割すれば良い。

段落分けが完了したら、続いて、自分の書こうとしている内容をそこに当てはめる。まずは結論から。そのときに、全体の整合性を取る必要があるのは以下のような項目になる。

- ①採用したパッケージ
- ②パッケージの採用目的
- ③外付けプログラム開発が必要になった理由
- ④上記の②と③のトレードオフを埋める工夫
- ⑤上記の④をもとに、利用部門と合意形成

この問題も、とても細かく問われているので、個々の項目については、そんなに多くのことを書かなくても良い（書くこともできない）。したがって、それぞれ一つの題材に絞り込むことが大切になる。

なお、この問題の設問には、「成果と今後の改善点」が含まれている。したがって2,200字以上の記述のうち、少なくとも400字程度は、旧試験のパターンがそのまま使えると判断できる。

●1.1 段落（システム開発プロジェクトの特徴）

ここは旧試験と変わらないところ。事前に準備しておいた“プロジェクト概要”を中心にアウトプットすれば良い。ただし、この問題では、プロジェクトの特徴が

問われているので、それを中心に据えること。システムの特徴を中心に持ってこないように注意が必要。

また、たまに「パッケージシステム開発プロジェクト」について書かれた論文を見かけるが、それは誤りである。この問題は、ある特定企業に対してパッケージシステムを適用するプロジェクトになる。そこは間違わないように。

【減点ポイント】

① プロジェクトの特徴ではなく、システムの話が中心になっている(致命度：中)

→ 後々に影響する内容ではないため致命傷にはならないが、システムアーキテクツの論文だと誤解を与えてしまう可能性がある。

● 1.2 段落(採用した業務パッケージとその採用目的)

続いて、採用した業務パッケージ(の概要)とその採用目的について論述する。

問題文では1～3行目までが関連する部分になるが、そこには、それぞれの例も記載されているため、自分自身が書こうと考えているもので問題ないかどうか必ずチェックしておこう。

- ・業務パッケージ(会計システム、販売システムなど)

- ・採用目的(業務プロセスの改善、開発期間の短縮、保守性の向上など)

ここで例示されている採用目的は、いずれも、システムそのものの導入目的ではない。あくまでも、独自開発とパッケージ開発を比較した結果、パッケージを採用した理由になっている。したがって、これら以外の採用目的にする場合でも、それが“パッケージの長所”を生かしたものでなければならない。もしも、パッケージの長所がいまいちよく分からない場合は、本書の「第8章 重要キーワード」で再確認しておこう。

それともう一つ。上記のような(問題文に出てくるような)例をそのまま対象パッケージとする場合には問題ないが、それ以外の場合は、以下の点で“対象パッケージ”としても問題ないかどうかをチェックしよう。

- ・業務で利用しているパッケージであること

- ・(パラメタ設定ではなく)アドオン開発が可能なパッケージであること
(大量市販品は不適當)

- ・独自開発で導入するという選択肢も一般的であること(パッケージとして導入することが一般的なら比較対象にならない)。財務会計システムや人事給与システムでも独自開発している企業は普通に存在している

【減点ポイント】

① 採用目的がパッケージの選定理由ではない(致命度：中)

→ この点を誤ると、後半に影響してきて徐々に書けなくなっていくはず。

●2.1 段落（外付けプログラムが必要となった理由とその概要）

問題文には「このような情報システム開発では、上記の目的を達成するためには、できるだけ業務パッケージの標準機能を適用する」というあるべき姿が記載されている。まず、このスタンスを直接的、もしくは間接的にアピールしなければならない。そして、「でも、ここだけはどうしても外付けプログラムが必要になった」という理由を主張する。

よくある理由には次のようなものがある。

- ・その企業のコアコンピタンス（その企業の強み。競争優位性を誇っている独自ノウハウの部分）
- ・短期的ではなく、長期にわたって混乱を招く部分
- ・直接的かつ大幅な減収減益につながる営業上の理由
- ・長期的視点でROIを分析した結果、アドオン開発が有利になった

【減点ポイント】

①外付けプログラムが必要最小限かどうかわからない（致命度：大）

→ この段落を読んだときに、採点者には“必要最小限だ”とか、“それは仕方がないな”と思わせなければならない。採点する人は、その部分をチェックするからだ。そのためには、できる限りパッケージの標準機能を適用するという姿勢をアピールするとともに、「とはいうものの……」という理由が必要になる。

●2.2 段落（利用部門との交渉）

設問イで最も重要なのがこの段落になる。具体的には下記のように問題文と設問で指定されている。

<設問>

- ・開発を必要最小限に抑えるために利用部門と合意した内容
- ・合意に至った経緯

<問題文>

- ・利用部門の合意を得た上でプロジェクトを遂行しなければならない
- ・PMは、開発が必要な理由を明確にし、開発がプロジェクトに与える影響を慎重に検討する

以上より、ここでは、PMが実施したアクションについて、“影響を慎重に検討した”点、“利用部門に説明した”点、その結果“利用部門と合意した”点の3点について言及しておかなければならない。

【減点ポイント】

①利用部門との交渉について詳細に説明されていない（致命度：大）

→ 採点講評でも述べられているが、利用部門と合意した内容や経緯について書かれていない論文では合格論文とはいえない。本問そのものが、この合意形成を最大の焦点にしているからだ。ちなみに、情報処理技術者試験でも、実際の開発現場でも、利用部門との交渉はとっても重視されているということも認識しておこう。

②開発がプロジェクトに与える影響を慎重に検討していない（致命度：中）

→ 設問では直接問われていないものの、問題文ではここも“あるべき姿”として肯定表現されている。つまり避けては通れないところなので、必然プロセスとして必要になる。

③開発が必要な理由を利用部門に説明していない（致命度：大）

→ 単に「利用部門と合意形成した」と書くのは誰でもできる。なので、それだけでは全く不十分。採点者は、論文の中に記載されている“開発が必要な理由”を見て、利用部門と合意形成できたことの妥当性をチェックし、評価するからだ。したがってその判断材料がなければ、評価することはできない。

● 3.1 段落（そのときに私が実施した工夫）

ここは適当な段落タイトルを付与するときに、少し考えなければならないところである。

設問に対応している問題文の該当箇所は、「その上で、開発の優先順位に基づいて開発範囲を見直したり、バージョンアップの容易さなどの保守性を考慮した開発方法を選択したりするなどの工夫をしなければならない。」というところ。そこで、工夫した点の例が二つ挙げられている。

ここを見れば明らかだが、1.2段落で説明しているパッケージの採用目的を確保するための策が、ここでいう工夫した点になっている。1.2段落の採用目的とアドオン開発はトレードオフの関係にあるため、どのようにバランスをとったのかという点だ。その関連性を考慮した内容にしなければならない。

【減点ポイント】

①1.2段落との関連性がない（致命度：大）

→ ここで問われている“工夫した点”は、換言すると、パッケージ採用の目的を（それを損なうようなリクエスト＝アドオン開発に対して）確保するためにどうしたのかという点について書かないといけない。それ以外の工夫は、ここでは求められていないため。

● 3.2 段落（その成果）

ここでいう“その成果”は旧試験でいう“私の評価”にはかならない。ただし、

自分自身の評価は感想になっても問題はないが、“成果”となるとそれは違う。「何が、どのようになったのか？」という事実を述べる必要があるからだ。旧試験で説明すると「評価の具体的理由」の部分に近い。

【減点ポイント】

①成果ではなく感想になっている（致命度：小）

→「良かった」という自己評価（≒感想）も当然必要になるが、それだけでは不十分。“私の評価”が“その成果”に変わっている主旨を汲み取ろう。

●3.3 段落（今後の改善点）

ここは旧試験のパターンと同じ。

●サンプル論文の評価

今回は、旧アプリケーションエンジニア（AE）試験過去の午後Ⅰの問題文を利用して作成してみた。旧 AE の平成 17 年度問 4 である。その理由は、午後Ⅰの事例が十分に擬似経験となり得ることを示したかったからだ（プロジェクトの特徴を考えるのが面倒になったということも）。したがって、経験が少なく擬似経験で論文を書き上げないといけない受験生は、旧 AE の平成 17 年度午後Ⅰ問 4 と比較しながらチェックして、午後Ⅰの問題を活用する方法をつかんで欲しい。ちなみに、このように午後Ⅰ問題文を活用すると、おのずと午後Ⅰの得点力アップにもつながる。

内容面では、これまでに説明してきたポイントはすべて網羅されているので全く問題ない。多少定量的表現に欠けているかなと思わせるところもあるが、問題文にも設問にも、「定量的表現」はリクエストされていないので、まず問題はないだろう。

特に注意したのは、この問題そのものが抱えている「システムアーキテクト的側面」に流されないようにすることだ。あくまでもプロジェクトを推進する視点で書かれていなければならない。そのポイントは以下のとおりである。

①プロジェクト方針の作成と公表

②利用部門との交渉（ただ、要件定義時の交渉にしてしまうと、それは SA の問題に限りなく近くなってしまう）

③設問ウの工夫した点が「プロジェクト計画」に関わること

サンプル論文では、上記の点に力を入れて書いたつもりである。個々の要素の配分を考えると、③の割合が少ないのが気になるが、そこはやはり設問ウよりも設問イの②を重視しているのだろう。そう考えて②を書いた。ただ、利用部門との交渉は、要件定義フェーズでシステムアーキテクト（SA）がやるべき作業の一つになる。そうしてしまうと SA の論文になる。時間軸は不明だが、要件定義フェーズで

はなく、立上げ時に近い話になるはずだ。そういう表現にする必要はあるだろう。

●試験センター公表の採点講評

本年度は、“論述の対象とするプロジェクトの概要”の記述内容の不備が目立った。解答を理解するための重要な情報であり、またプロジェクトマネージャとしての経験が表現されるので、的確に記述してほしい。

本年度の試験から、設問ウでは論述内容をより具体的に表現するような問い方をした。中には設問イと設問ウの論述の重複や、設問ウに論述すべき内容を設問イに論述しているような解答も見られた。また、答案用紙の解答欄が設問ごとに指定されていたが、これに従わずに、設問イの論述に続けて設問ウの解答を論述したり、解答字数の指定を守らなかったりした論述も見られた。問題冊子の注意事項、設問の要求内容をよく理解して解答してほしい。

各問に共通した点として、設問アではプロジェクトの特徴に対して、システムの特徴を記述する論述が多かった。また、問2、3においては、設問イ、ウでは開発者の視点からの論述が見られた。求められているのは、プロジェクトに関するプロジェクトマネージャの視点からの論述であることをしっかり認識してほしい。

問3（業務パッケージを採用した情報システム開発プロジェクトについて）では、業務パッケージの標準機能をできるだけ適用し、外付けプログラムの開発を必要最小限に抑えた経験がうかがえる論述が多かった。しかし、設問で求めている、開発を必要最小限に抑えるために利用部門と合意した内容や合意に至った経緯については論述されず、開発した外付けプログラムとその必要性の説明に終始した論述も見られた。また、外付けプログラムを開発する際の工夫点について論述されていないものも見られた。



サンプル論文

1. プロジェクトの概要

1.1 プロジェクトの特徴

私は、従業員数百人程度の小規模SIベンダーに勤務している。今回、私は昔からの弊社顧客であるN社の基幹業務システム再構築プロジェクトを担当することになった。

プロジェクトの特徴になっても、論文の立上がり部分は普遍。従来どおりで構わない。逆に、いきなりプロジェクトの特徴から展開されると、唐突過ぎる印象で、あまり望ましくない。

N社は、鉄鋼及び非鉄金属の板材、線材、棒材、パイプ、形鋼などを扱っている中堅の鋼材卸問屋である。その当時N社は全社的業務改革を進めており、基幹業務についてはERPパッケージを導入してシステムの全面再構築を図ることになった。その導入プロジェクトを弊社が受注し、私がプロジェクトマネージャに指名された。

AEの平成17年度午後I問4の文章をそのまま使う。変更点は時間軸だけ。論文は過去の事例を述べるので、“現在”を“当時”に変えてみた。

プロジェクトの期間は約1年、ピーク時の要員は20名で、総開発工数が200人月である。

AEの平成17年度午後I問4では、プロジェクトそのものの概要がなかったので、ここは付け加えた。

1.2 採用した業務パッケージとその採用目的

今回導入したERPパッケージは、弊社が開発したパッケージ製品で、N社の属する業界にも数多くの導入実績がある。適用する範囲は、財務会計と販売管理業務で、将来的には、人事給与等にも展開していく予定をしている。

パッケージとくれば適用範囲の説明は必須。単にERPパッケージというだけでは不十分。

しかし、N社では最初からパッケージを導入することが決まっていたわけではない。というよりも、むしろ当初は独自開発で話が進んでいた。

でも、N社社長の唱える今回の再構築そのものの狙いである「計画・管理の統合化を図り、定量的かつ適時に前者の経営状況を把握して、顧客ニーズにすばやくこたえ、経営環境の変化への対抗を早めること」を、独自開発では満たすことは困難である。そこで、ERPパッケージを導入することになったわけだ。

AEの平成17年度午後I問4の文章を引用。パッケージ採用目的の前に、再構築の目的が必ずある。それを説明している。改めて見ると、午後Iでもまあまあ難しいことを説明していることが分かるだろう。

ERPパッケージの持つ長所たる“開発期間の短縮”と“業務プロセスの改善に対する牽引役”に期待して、導入する事を決めた。

これが結論であり、読み手に記憶させるところ。改めて最後に整理しながら強調した。

2. 業務パッケージを採用した情報システム開発プロジェクトについて

2.1 外付けプログラムが必要となった理由とその概要

私は、今回のプロジェクトの目的やパッケージ採用に至った背景を十分に踏まえて、次のような導入方針を立案した。

問題文では、まず方針について利用部門と合意しておくことが求められている。したがって、今回のプロジェクトの方針について説明しておく。

<導入方針>

- ① システムの導入コストよりも、早期導入を最優先し、社長自らが今回のプロジェクトの責任者となる。
- ② 原則として、業務プロセスをERPパッケージに合わせる。

引用元の午後Ⅰ問題文では、もっと数が多かった。しかし全部は書けないので問題文に合致する最重要なものだけに絞りで言及している。

この方針を立案し、社長の下承を得た。そして、その後、利用部門の人たちを数回に分けて集めて説明会を開催し、そこでも合意を得た。

その後、フィットギャップ分析を進めていくことになったが、そこで、いくつか外付けプログラムで対応しなければならなかったところがあった。具体的には、受注部分が弊社のパッケージで用意している形態と、N社で行われている形態とで大きく違っていたのだ。

外付けプログラムの概要が求められているので、せめて、この部分なのかは説明しないといけない。ただ、どこまで説明すれば良いのか迷うところでもある。あまりここばかり膨らませるとSAの論文になってしまうからだ。

受注部分は、その企業のコアコンピタンスでもある。それに、N社の商取引や商習慣から見て、業務遂行上、必須の機能である。したがって、その部分は業務は現状のままでパッケージに外付けプログラムを開発して対応することにした。

これが、外付けプログラムにした理由。ベースはこれまで同様午後Ⅰからの引用。この部分だけでも合理的な理由だと判断できる。知識のアピールにもなっているの、まとまった文章にしよう。

2.2 利用部門との交渉

今回の外付けプログラムについては、フィットギャップ分析をしていく過程で発見できたため、その当事者だった営業部門とはすでに合意できている。というよりも、営業部門からの要求になる。しかし、その開発にはコス

ここで交渉プロセスを丁寧に説明する。ここがこの論文の見せ所。

トもかかるし、それ以上に当初の方針とも異なる。

私は、今回のプロジェクトの責任者である社長と、その他利用部門の関係者に、外付けプログラムが必要な理由を説明しなければならないと考え、説明会の開催を要請した。

数日後、その要請は認められ、説明会が開催されることになる。そこで、私はまず、外付けプログラムが必要な理由をわかりやすく説明した。具体的には前述のとおり、競争優位性を損なうことになるからだと。

私からの説明が終わると、参加者から「そもそも今回の方針と違うのではないか」という意見や、「早期導入が困難にならないか」という質問が出てきた。しかし、これも想定済みだった私は、その外付けプログラムの開発がプロジェクトに与える影響（設問ウで詳細は説明する）を慎重に検討していたため、それを説明し納得してもらえた。

問題文では「利用部門と」の交渉になっている。また、通常は経営トップの要請なのかもしれない。しかし、今回は社長をこちらに入れてみた。利用部門の長という位置付けた。

交渉の場を明確にする。

1.2 段落で説明しているものの、読み手は忘れていないかもしれない。繰り返し説明しても問題ないし、よりわかりやすくなる。

説明会の場面をイメージできるぐらい詳細に表現してみた。合意に至った経緯が求められているので、それを臨場感で表現した格好だ。

一方的な押し付けはNG。説明だけでは不十分で、話し合いを表現する。

3. 外付けプログラムの開発

3.1 そのときに私が実施した工夫

説明会を開催したことで、無事、利用部門と外付けプログラムを開発することで合意できた。しかし、説明会の場で出された質問からも明らかなように、今回、パッケージを採用する目的を損なうようでは、本末転倒になりかねない。例外部分とはいえ、そこは、パッケージの採用目的を十分考慮したものにしなければならない。

あるべき姿、姿勢を十二分にアピール。ここが重要。

そこで私は、プロジェクトをパッケージの基本機能の導入プロジェクトと、外付けプログラムの開発プロジェクトに分けて進めていくことにした。それに合わせて、外付けプログラムと連携が必要な部分の開発（売上機能や、在庫問合せの機能など）を後回しにし、独立して導入可能な部分（出荷業務以後の機能、請求機能など）の開発から優先して導入するよう計画を変更した。これによって、当初の採用目的だった「早期導入」は十分確保できる。先の説明会でもこの点を説明したから納得してもらえた。

目的が「早期導入」なので、それには開発の優先順位を見直すという選択肢をとった。その結果の一つが二分である。

ここでも最後まで繰り返し「早期導入」をアピール。一貫性がある。

3.2 その成果

“評価”と違い“成果”である点に注意。

1年後、プロジェクトは無事完了した。利用部門に十分説明していたおかげで混乱を招くことなくプロジェクトを進めることができた。しかも、プロジェクトを二分したことで、営業部門以外の利用部門に対しては、当初の方針通り早期導入という目的が達成できた。

3.3 今後の改善点

旧試験どおり。設問ウが変わったといっても、全部を変えることはできない。

ほぼ問題なくプロジェクトは完了したが、今から振り返れば、当初のプロジェクト方針を発表するときに、外付けプログラムの採用基準を決めていれば、説明会も簡素化できたかもしれない。

今回の経験を教訓に、利用部門を不安にさせないためにも、プロジェクトで発生しそうな事態はできる限り事前に予測し、それを立ち上げ時に説明できるように頑張

これは良いフレーズ。PMBOKでも“教訓”という言葉はよく使われている。PDCAサイクル、継続的改善、成長などすべてを包含する言葉。

っていきたいと思う。

(以上)